（様式第３号の１）

博士（甲）論文審査及び最終試験結果報告書

平成28年　3月1日

文学研究科教授会　殿

論文審査及び最終試験委員

主査 宮川美佐子 印

副査 吉田徹夫 印

副査 白井剛 印

論文審査及び最終試験の結果を下記のとおり報告します。

記

専攻及び課程	学籍番号	氏名
英文学専攻博士後期課程	06英博後２	濱　奈々恵

審査論文題目	George Eliot作品における大英帝国の影 —帝国主義への懐疑から文化的混淆への転換—
論文審査及び最終試験報告	㊀　　否
博士論文提出資格取得日	平成　25年　3月　5日
博士後期課程退学日	平成　25年　3月　31日

論文審査及び最終試験結果の要旨

論文題目：『George Eliot作品における大英帝国の影

—帝国主義への懐疑から文化的混淆への転換—』

提出者氏名:　濱　奈々恵

論文概要：

George Eliot の作品に、植民地の問題を直接扱ったものは少ない。また、残された日記や書簡にも帝国主義への言及はほとんど見られない。しかし、Eliot が作家として活躍していた当時は、大英帝国と植民地の関係から目を背けられない時期であり、また Eliot 自身、内縁の夫であった George Henry Lewes（1817-78）の次男 Thornton Lee Lewes（1844-69）を植民地政策に関わる活動で亡くしている。本論文では、テクストを丹念に読むことによって浮かび上がってくる大英帝国の影を考察し、Eliot の帝国主義への態度とその変遷を分析した。特に、1820 年代から 1830 年代を時代設定に取る 6 作品を取り上げ、英国を至上とし他国や他民族を見下す登場人物の帝国意識を Eliot が批判的に描いていること、Eliot の関心が国内での多文化社会の問題に向くこと、最終的な Eliot の理想が結婚による異民族間の融合ではなく各民族が自律性を保ったうえでの混淆だということを論じた。

第一章で扱った *The Mill on the Floss* (1860)では子どもたちが読む本に注目し、帝国意識を育む土壌とその帝国意識があらわになる瞬間を考察し、成長するにつれて Maggie と Tom の兄妹間で帝国主義との関わり方に違いが生じていく点を論じた。第二章から第四章では、国外、特に植民地やそれに準じる土地の描かれ方の変遷をたどりながら、登場人物たちの価値観を探った。第二章では“Brother Jacob”(1864)に描かれる国外への展望にあからさまな帝国意識があることを読み取り、Eliot の批判の矛先が主人公 David だけでなく、彼と共に植民地幻想において共犯関係を持つ町の住民たちにも向けられている点について論じた。第三章では、*Felix Holt, the Radical* (1866)を Elizabeth Gaskell（1810-65）の *Cranford*（1853）と比較しながら、国外から帰った人が町の救世主とはならない点、およびイギリスの価値観だけが継承されないストーリー展開について考察した。第四章では *Daniel Deronda* (1876) で Gwendolen Harleth が失った金銭に注目して、イギリス国内での価値観が植民地経営から荘園へ、言い換えれば国外から国内へと変化している点を考察した。また、Grandcourt が支配者として、Gwendolen ら女性が被支配者として植民地のメタファーを用いて描かれていることを指摘した。

第五章で扱った *Middlemarch*（1871-72）では「外」の世界が必ずしも植民地を意味しなくなっており、はっきりとした帝国主義の言説は見えにくくなっている。しかし、「内」と「外」という概念は継承されており、「内」はイギリスの田舎社会、「外」は国外（主にヨーロッパ）として捉えられている。Eliot は本作品以降、登場人物たちに国外への勢力拡大よりも国内での多文化社会の創出と維持へと向かわせており、保守的な態度に転じている。しかし国内の立て直しには国外からの良い影響が必要だと考え、このバランスが取れた人物を理想的なコスモポリタンとして捉えている点が特徴的であると論じた。第六章で扱った *Daniel Deronda* はユダヤ人の青年が国家建国を目指して東洋に旅立つところで終わる。この結末についてポストコロニアリズムの批評家からは「ユダヤ人排斥」との指摘が出て、Eliot の保守的な態度

が批判された。
主人公が国家建国を目指して外に出て行く展開は *The Spanish Gypsy* にも見られる構図であるが、どちらの場合も民族の存続に大きな比重が置かれている。George Eliot は作家になる以前から、異民族同士の結婚には難色を示しており、異種族混淆よりも文化的混淆によって民族が共生する世界を理想化していた点を論じた。

George Eliot は作品の執筆を重ねるごとに、「外」の概念、あるいは「外」との関わり方を考え、多民族、多文化の理想的な共生の方法を模索し続けた作家であった。また彼女は宗主国の立場にいながらも、常に複眼的な視点から非宗主国に寄り添う作家でもあったと結論づけた。

講評：

George Eliot はヴィクトリア朝を代表する小説家の一人であり、膨大な先行研究が存在する。しかし、作品に直接的な植民地主義との関わりが少ないことから、このテーマで論じた研究はあまり多くない。本論文は、この点で意欲的に新しい切り口に挑戦した研究と言える。同テーマの研究書として、Nancy Henry, *George Eliot and the British Empire* (2006)があるが、この本が伝記的資料を使って Eliot 個人の帝国との関わり、経済活動に注目することが多いのに対し、植民地表象と各作品の分析に重点を置いたのが本論文の特徴である。また、一部のポストコロニアル批評において Eliot が民族の分離を支持していたと批判されることに対し、各民族が支配・被支配の関係を避けるために独自性を保つことに Eliot の真意はあったのであり、彼女が常に弱者の側の視点を忘れることはなかったということを、作品や書簡のテクストから実証した。

作品論では、第二章の "Brother Jacob"の分析が特に高く評価される。ジャマイカで失敗する主人公のみならず、植民地帰りを理想化する英国の地方都市の人々の帝国意識をも作者の批判の対象として考察した。海外の植民地で成功できない者が国内で代用の植民地を築こうとするという指摘も興味深い。類似の例は第三章の *Felix Holt*、第四章の *Daniel Deronda*、第五章の *Middlemarch* 論にも見受けられ、繰り返されるモチーフとなって論文に深みを与えている。また、第一章の *The Mill on the Floss* 論での幼い兄妹の分析を皮切りに、第二章、第三章にも継承された、読書が安易な帝国意識を育てることがある、という考えも説得力と今後の発展を期待させる。見逃しがちなテクストの細部に注目し、帝国主義という糸で巧みにつないでみせたと言えるだろう。

このように各作品論としても、また Eliot 論としても優れた点が多い一方で、Edward Said の援用はあるものの、hybridity を論じるのであれば、Homi Bhaba をはじめポストコロニアル理論による全体の肉づけがもっと必要だったのではないかと思われる。また、植民地との関連が捜しにくい *Middlemarch* 論では、コレラや鉄道という要素への着目は面白いが、宗主国と植民地からイギリス国内と国外という二項対立にシフトしたために、議論がやや曖昧になり、焦点を絞りにくくなったのは残念である。コスモポリタンという概念で分析するなら、ヒロイン Dorothea のイタリア経験も考慮すべきであるとの審査員からの指摘もあった。とはいえ、本論文の全体的な主張には説得力があり、各作品論も堅実に書かれていることに疑いはない。"Brother Jacob"のように、従来 Eliot 研究においてさえほとんど顧みられてこなかった短篇に注目し、単にマイナーな作品を掘り起こしたという以上の刺激的な読みを展開したことは特筆に値する。また、先行研究を網羅し批判的に活用していることは、著者の研究者としての熱意と誠意を感じさせる。

以上のことから、論文審査委員会は、本論文が課程博士号に値する優れた研究であると全員一致で結論した。